

BL解放性論議 —オメガバース設定の登場—

The Liberate Dabate in Boys Love: After Yaoi to Omegaverse Settting

新嶋 良恵¹⁾
NIIJIMA Yoshie

渡邊 志歩²⁾
WATANABE Shiho

要 旨

ボーイズラブ（BL）作品は、女性読者にとってのユートピアだといわれてきた。女性キャラクターの不在は、「女性」であることに付随する性役割から読者を開放し、男性同士の恋愛模様集中しながらその物語の世界観に入り楽しむことを可能とする。描かれる側に自身を据えることなく、疑似恋愛を妄想する空間は「安全装置」の役割を用意し、女性を従属的なジェンダー構造から解放する場であるという。しかしながら近年興隆してきたジャンルとして、男性の妊娠・出産を可能とする新たな「生物学的生（セックス）」を描くオメガバース作品がある。こうした新たな「生（セックス）」の登場により、ファンタジーとしてのBL需要と女性の社会的役割の文脈におけるBLの安全装置としての機能は検討を迫られている。「妊娠・出産する身体」と規範、「身体性に基づく階級づけ」など、生物学的「生」と社会的「性（ジェンダー）」の負の関係をあえて持ち込むオメガバース設定はBLを読むものにとってどのような意味を持ちうるのか。女性の社会的役割を排除したユートピアとして存在したBLからどのような変化を意味するのか。これまで、「BLは読者をジェンダー規範から解放する役割を果たす」としていた先行研究の議論を整理し、表象と社会的位置づけの関係性はどのように考えられてきたのか、やおい以降のBLをめぐる言説の記録としたい。

1 はじめに

BL（ボーイズラブ）は、男性同士の恋愛や感情的な絆を描く作品群を指し、女性オーディエンスにとってそれを読む体験は、物語と自身の距離を確保しながら男性の恋愛模様やセックスをのぞき見る感覚を与えるものである。BLは、男性の身体を眼ざす主体として女性を位置付けることを可能にし

¹⁾ 十文字学園女子大学 教育人文学部 文芸文化学科

Department of Literature and Culture, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

²⁾ 株式会社ステインラボ
StainLab Co.

(千田：67)、女性たちが女性としての役割を男性キャラクターに仮託することで逃避し、解き放つ（溝口、2015：10）¹。

時に「攻め（セメ）／受け（ウケ）」構造が、従来の異性愛規範を内面化し、ジェンダー規範を再生させるものとして批判を受けるBLであるが、「蹂躪する〈攻〉」と「懐柔される〈受〉」という表象によりヘテロノーマティブな性役割の再演を行っているとい括りにすることは早急であろう。BLを読む女性にとってBLの世界は、自分が性的な対象にならずに恋愛やセックスを妄想する空間を保つ「安全装置」の役割の果たし（上野2002）、女性を強制的な母性のジェンダー規範から解放する役割を持つ（金田 2007、溝口 2015）といったように、BLはジェンダー規範からの解放という視点から評価もされてきたのである。

以上のようなBLをとりまく研究者による言説は、キャラクターの身体的対等性を前提としてきた。一方で、近年では、男性が妊娠や出産を経験するという新たな「生物学的性（セックス）」を描いたオメガバース（Omegaverse）設定が登場した。オメガバースは、BLのサブジャンルにおいて登場する架空の性別制度であり、「産む男性」表象を出現させた。そこでは、妊娠や出産が作品の主題となっている。規範に従うかそれに対抗するかというプロセスを探求するカルチュラル・スタディーズの視座に立つならば、このような性別役割の流動性を探求する新たなサブジャンルの出現は非常に重要であると考えられる。なぜなら、オメガバース作品における身体の表象は、「生（セックス）」と「性（ジェンダー）」を交差させるものであり、女性役割の再考を迫る表現であるからだ。女性の身体へと課せられた役割について「解放」や「忘却」を可能としてきたBLの「安全装置」として機能は再考を迫られている。

BLは、異性愛的なジェンダー規範や社会的期待から解放し、読者にとって性別やジェンダーの役割を再検討させる空間として機能してきたとも考えられる。そこで、本稿では、BLがなぜ読まれるのかについて考察した研究言説をBLの機能についての論議を主として整理し、BLというジャンルに託されてきたアンチテーゼとしての社会的位置づけを明らかにしていく。BLが社会的規範をどのように再構成する可能性を持つのか、BLに課せられたアンチテーゼの意義と「生（セックス）」と「性（ジェンダー）」が交差する表象の探求は、文芸批評における「読者がテキストを読む理由」に対する理論的探求の根幹に迫る重要な視点を提供する。

2 規範へのアンチテーゼ

2.1 BLの確立と発展にみる規範へのアンチテーゼ

BL（ボーイズラブ）ジャンルの漫画作品において、女性キャラクターの不在は、女性読者に自身の「女性」としての性役割を一時的に忘れさせる機能を果たすとされている。男性キャラクターたちを通して女性たちが女性としての役割を男性キャラクターに仮託することで逃避し、解き放たれることで自由自在にラブやセックスを楽しむことができるのがBLだ（溝口、2015：9）²というわけである。BLを女性たちのファンタジーを具現化する装置として捉えるという共通点（張：116-117）については、ジェンダー構造の批判と脱構築を試みる研究によって論じられてきた。そこでは、男性同士の恋愛を描くことで、女性読者が異性愛的なジェンダー規範や社会的期待から解放される場として機能するという指摘が、なされてきた。この視点において、BLは、読者が従来の性別役割やジェンダーの規範に縛られずに物語を享受し、性別に対する新たな視座を獲得する契機を提供するとされている。

本節では、少女漫画における異色の「少年愛」、漫画の規範に抗する形で登場した「やおい」からBLへの連なりを整理し、それらがどのように位置づけられてきたか明らかにする。この作業によって、規範へのアンチテーゼが同人誌文化の歴史的背景においていかに重要なテーマとなってきたか見通しが良くなるだろう。1970年代から80年代にかけての美少年たちの官能的な性愛を描いた耽美な「少年愛」の表象から、「やおい (Yaoi)」へ、そして女性キャラクターが不可視化されるBL構造へとジャンルとしての変遷は以下のようなものであろう。

「少年愛」表現とは、少女漫画の一部として登場した。特に、竹宮恵子や萩尾望都などの作家による「少女革命」と呼ばれる時期³に、男性同士の恋愛を描いた作品が発表され、これがBLジャンルの基礎を築いたとされるのがおおむね一般的であろう。これらの作品は、女性作家と女性読者を中心に展開され、ジェンダーやセクシュアリティの規範に挑戦するものとして受け入れられていった。

竹宮恵子らによって開拓された「少年愛」の表象は、当時の少女漫画において「異性愛」を前提としない恋愛関係を描き、少女たちに新たな視点を提供したという（石田 2012：127-128）。竹宮による『風と木の詩』などは、異性愛中心の社会規範を揺さぶる要因として、同性愛的関係を描くことで、従来の異性愛的ジェンダー枠組みの外側にある恋愛の可能性を読者に示し、また読者が触れることを作品に託していたと読み解くことができるのである。

『風と木の詩』が少女たちに提供した最も重要な視点は、異性愛を前提としない恋愛関係を通じて、従来のジェンダー役割の固定性を相対化するという点にある。『風と木の詩』の中心に据えられているのは、主人公のセルジュ・パトゥールとその親友であり恋愛対象となるジルベール・コクトーとの関係である。この二人の関係は、従来の少女漫画で一般的だった異性愛的な男女の恋愛から大きく逸脱しており、男性同士の感情的・身体的な結びつきを中心に描かれている。特に、ジルベールが持つ繊細で儂げなキャラクター造形や、セルジュとの複雑な愛憎関係が、単純な「友情」や「仲間意識」を超えて、恋愛や性的欲望が含まれる関係として読者に提示されている。このような描写は、1970年代において極めて異例であり、従来の少女漫画で描かれてきた「理想的な異性愛的ロマンス」に対する挑戦であった。特に、女性読者が「同性間の恋愛」というテーマを通じて異性愛中心の社会規範から距離を取る機会を提供し、ジェンダーやセクシュアリティの多様性を探る契機となったという。

セルジュとジルベールの関係には明確な「攻め」と「受け」の二極的な役割が見られるものの、それが従来のジェンダー規範に縛られず、流動的かつ柔軟に変化していく様子が描かれている。これは、固定されたジェンダーの枠組みを超えた多様な男性性や恋愛関係の描写として評価されている。セルジュとジルベールの関係において、セルジュは典型的な「攻め」キャラクターとして描かれ、ジルベールは「受け」キャラクターとして表現されるが、二人の間には固定的なジェンダー役割が存在しない。これは、男性キャラクターでありながら「女性的な脆さ」を持つジルベールのキャラクター造形や、時にはジルベールが主体的に感情や欲望を表現する場面を通じて、従来の男女間のジェンダー役割を解体する試みが見られる⁴。

この作品がその後の少女漫画へと与えた影響は、少女たちが既存の異性愛的なジェンダー枠組みから距離を取り、ジェンダーやセクシュアリティに対する自由な想像力を養うことを可能にした点にあらう。特に、少女読者は、男性同士の恋愛を通じて、社会において期待される異性愛的な規範や男女の役割分担に縛られない新たな視点を持つことができた。竹宮恵子の『風と木の詩』は、後のBL作品に大きな影響を与え、BLというジャンルが異性愛的なジェンダーの枠組みを脱構築する場として進化する契機となったのだ。『風と木の詩』は、ジェンダーの流動性や柔軟性を強調するジャンルへと発展する

基盤を作り上げた。竹宮の作品は、BLの基礎を築いた作品として、後のBLにおけるジェンダー規範の脱構築に多大な影響を与えている。

2.2 「やおい (yaoi)」の語源と規範へのアンチテーゼ

主に男同士の性愛関係を描写するジャンルとしての発展は、「花の24年組」と呼ばれたマンガ家たちによる「少年愛」作品にその起源をたどることは先行研究からも順当とされるが、「ヤマなし、オチなし、イミなし」を意味するやおい（石田 2008、柚原 1998）とのアンバランスさには違和を覚えるとの声も少なくない。しかしながら、「少年愛」作品が、少女漫画において女性キャラクターでは表現し得なかった自由さを持ち、新たな物語を構築するための葛藤的な試みであったという、いわば当時主流であった少女漫画へのアンチテーゼであったことを考えれば、BLへと繋がる規範への挑戦的表象の起源であったとみることは受け入れられるだろう。「やおい」という概念は同人文化において発展していくことから、その用法や意味は特定の規範に対する批判的な視座を持つものであることが明らかである。

1980年代、日本の同人誌文化において形成されたやおいの語源は「山なし、落ちなし、意味なし」というフレーズに由来し、この言葉は物語の定型的な起承転結の構造や、従来の物語論に対するパロディ的、批判的な意味合いを持っていた。従来の物語構造や社会的規範に対するパロディ的な反抗を含むものとしても考えられる。物語の「山」や「落ち」といった従来のストーリーテリングの要素を敢えて排除することで、やおい作品は既存の文学的・物的規範に対する反抗として機能する。BLジャンルの確立において中心的な役割を果たした人物として位置付けられる中島梓（栗本薫）はやおいについて、「意味のあることだけが正しい」とされてきた規制社会の原理への挑戦であると記す（1979：181）。それは、「ヤマありオチありイミあり」社会に対するゲリラのテーゼ（181）であるとした。

この「意味のなさ」は、規範的なナラティブ構造に従わない自由な創作を許容する姿勢を示しており、従来の物語的な規範を逸脱する試みとして解釈される。この背景には、商業的な漫画や文学に対する同人誌作家たちの反発や独自性の模索があった。「やおい」というジャンルは、単に物語構造に対する批判にとどまらず、パロディという形で商業的な作品に対する批判を含む文化的な反抗の手段でもあった。多くのやおい作品は既存の商業作品（アニメや漫画）のキャラクターを借用し、異性愛的な関係を男性同士の関係に変換することで、既存のキャラクターの意味や役割を再解釈し、それをパロディ化する。これにより、商業的な作品の規範や意味構造を意図的に歪め、新しい意味や視点を与えることが行われていた。やおい作品は、従来の作品の世界観やキャラクター設定を破壊し、自由な創作活動を促進する場として認識されることで、商業文化に対する文化的反抗としての役割を担っている。このように、やおいは単なるファン活動や娯楽ではなく、規範に対する意図的な挑戦であるという見方ができる。

やおいはまた、性やジェンダーに関する規範にも挑戦している。やおい作品は、一般的な異性愛規範や性役割に対する反発の表現手段としても機能してきた。多くのやおい作品は男性同士の恋愛や性的関係を描いているが、これらは異性愛的なジェンダー役割を無視、もしくは意図的に変容させることで、性別やセクシュアリティに対する規範的な枠組みを揺さぶる意図があるとされる。やおいが異性愛的な性役割を解体するものであることが強調されるのが主流であろう。作品においては、伝統的な性別の役割が曖昧化され、従来のジェンダー規範を逸脱する関係性が描かれる。この点で、やおいは性的規範に対するアンチテーゼとして機能し、固定的なジェンダー観を解体する力を持つと解釈される。特に、異性愛規範に対する挑戦や、固定的なジェンダー観を揺さぶる意図が作品の根底に存在しており、その文

化的・社会的意義は広範にわたっている。以上から導かれることは、「やおい」という概念は、商業的な規範や異性愛的なジェンダー役割をパロディ的に解体し、自由で創造的な空間を提供する重要なメディアとして機能していると言えるという点である。

1990年代には、やおいから派生したBLが商業市場で確立され、多くの出版社がBL作品を刊行するようになった。そこでは、商業作品のキャラクターを使用して男性同士の恋愛を描く同人誌として発展し、特に商業的な規範に対する反抗の表現とされる。やおい同人誌は、既存のキャラクターや物語をパロディ化し、ファンの手によって自由に再解釈される場として機能したため、BLの拡大と多様化に寄与した。やおいは商業BL作品とは異なり、非公式のファン活動としての側面が強かったが、やがて商業BL作品の源流となり、BLジャンル全体に大きな影響を与えた。その後、やおいた的な表現やテーマは商業BLに取り込まれ、男性同士の恋愛を描く作品が一つのジャンルとして定着した。この時期には、特にティーンズ向けに展開されるBL作品が増加し、読者層も拡大していった（前川 2012：138、堀 2012：178-179）。

このように、やおいが持つ自由な創作精神が商業BLに影響を与え、BLはより広範な読者に支持されるジャンルへと進化していった。「70年代にはじまり、知る人ぞ知るひそやかな楽しみであったものが、同人誌やBLの拡大、アニメやゲーム、BLCDなど複数メディアへの進出によって、多くのファンを獲得し巨大な市場を持つに至った」わけだが、「この〈浸透と拡散〉によってヤオイは、もはや密やかであることを許されなくなった」（堀 2012：178）。目に見える存在となり、それに伴いゲイ表象の問題を頭を低くしてやり過ごせなくなってきた、というのが現在の状況といえるだろう（堀 2012：178-179）。

2.3 ジェンダー規範へのアンチテーゼ—進化系BLにおける攻めと受けの再解釈—

BLは異性愛的規範に縛られずに、ジェンダーの役割やセクシュアリティを自由に想像できる空間を提供し、読者が既存のジェンダー規範から距離を取る機会を与えるものであろう。BL作品においては、「攻め」と「受け」というカップリングが一般的であるが、この関係性は異性愛的なジェンダーの枠組みに必ずしも従わない。攻めキャラクターが必ずしも「男性的」な役割を果たすわけではなく、受けキャラクターもまた「女性的」な役割にとどまらないという柔軟性が見られる。

やまだ：私は『風と木の詩』なんかを読んだときに、ジルベールは男の子とも女の子とも思えなくて、この人はこんなふうにするために作られた性別の人だって思ったのね。男の子とか女の子とかじゃないじゃん、なんかあの人。

よしなが：それを〈受〉っていうんですよ。

やまだ：（爆笑）

よしなが：男でも女でもないんですよ。〈受〉っていう性別なの、っていう。

福田：「性別・ジルベール」とも言われてるけど（笑）

（よしながふみ：25）

耽美な「少年愛」表象からいささかの断絶を経て、商業漫画のパロディとして登場するやおいを引き継ぎながら発展した初期BLでは、「受け」は女性的な外見や性格を持ち、「攻め」は従来の男性性を象徴する強い存在として描かれる。石田美紀（2008）は、やおいから発展した初期BLにおける「受け」と「攻め」の構造について、女性的役割を担う「受け」と男性的役割を担う「攻め」という典型的な性

役割の再現を指摘している。また、藤本由香里（1998）も、「攻め」と「受け」の関係が従来の異性愛的なジェンダー規範を反映していると論じ、これらの作品における性別の役割が男女の異性愛関係における伝統的な役割分担を模倣していると考察している。

攻めである男性的なリーダーシップや性的主体性を象徴し、受けは女性的な従順さや感情的な感受性を具現化する。男性同士の関係性が「攻め＝男性的主体」と「受け＝女性的受容者」という従来の性別役割に従って表象されてきた。これにより、BL作品は従来のヘテロノーマティブな性役割の再演と解釈され、学術的批判においては、BLがジェンダー規範を補強し、性役割の固定化を助長しているといえるのである。「マスキュリンな攻め」と「フェミニンな受け」という既存の男女性別役割にのっとった表象がみられることは、二項対立的な性別役割としてジェンダー研究においてしばしば議論の対象となっている。

2000年代にはいるとこうしたBLの定型に収まりきらない多様な表現が登場した。溝口はこれらを「進化系BL」と呼ぶ（2015）。先に論じたように、保守的なジェンダー再生産に寄与しない、多様な攻めと受けの形式が観察されるようになるのだ。ここきて、攻めと受けの役割が反転したり、キャラクターの性自認が曖昧に描かれたりすることで、既存のジェンダー観を揺さぶる試みが行われるようになった。男性同士の愛情や欲望を描く点で、既存の性別役割を揺るがす側面もあるとされるのだ。例えば、代表的な作品の一つである中村春菊の『純情ロマンチカ』（2002年初連載）では、攻め役である宇佐見秋彦は、強いリーダーシップを持つ一方で、受け役である高橋美咲に対して非常に感情的で繊細な一面も見せる。これにより、攻め役と受け役の役割が従来のジェンダー規範に沿ったものであるとは言い難くなり、読者に対して、男性性が一元的ではなく多面的であることを強調している。

溝口（2015）の表現を借りるとこのような進化系BLと呼ばれる作品では、攻め役と受け役の役割が反転したり、曖昧になったりする描写が増加した。例として、やまねあやの『ファインダーシリーズ』（2002年初連載）では、主人公である麻見隆一と高羽秋仁の関係性は、典型的な攻め・受けの役割を超え、時には互いに攻め、時には受けの役割を果たすという、より流動的な関係性が描かれている。このような関係は、男性性の固定されたイメージを解体し、新しい形で再構築されている。登場人物の男性たちは、感情的な脆弱さを持ちながらも強さを示す一方で、恋愛関係においても役割の固定化から脱却しつつある。このようなBL作品における男性性表象の変化は、社会全体におけるジェンダー観や性役割に対する意識の変容と密接に関連している。

2010年代以降、BLジャンルはさらなる進化を遂げ、オメガバースなどの新たな設定が登場した。オメガバース（omegaverse）は、男性が妊娠できる設定や、 $\alpha \cdot \beta \cdot \Omega$ という新たな社会的階層を取り入れることで、性別や性役割に関する従来の規範を超える試みとして注目されている。これにより、BLはさらに多様な展開を見せ、ジェンダーやセクシュアリティに対する新しい視点を提供するメディアとして進化している。オメガバース設定の登場とその社会的位置づけについては章を分けて議論していこう。ここでは、新たな展開としての紹介にとどめ、BLの歴史として、その背景に規範に対するアンチテーゼとして同人誌文化を通じての基盤形成があったことを記しておく。

BL作品は従来の固定されたジェンダーロールから解放され、男性性の表象はより複雑で多層的なものへと進化している。BL作品の多様化が進み、より複雑で多層的な男性性表象が現れ始めたことと観察できる。男性キャラクターの性格や役割が従来の固定的なジェンダーロールから解放され、より流動的で柔軟なものとして描かれる傾向が強まっていることが確認できる。特に、攻め・受けの二元的な役割が曖昧化し、キャラクター同士の関係性が流動的かつ柔軟に描かれるようになったことは、BLジャンル

全体の重要な発展であるとされている。後期BL作品や近年交流めざましいオメガバース作品群など、性別役割の流動性を探求する新たなサブジャンルの出現が、従来の「マスキュリン／フェミニン」の枠を超えた多様な表象が注目される中、BLにおける二項対立的な性別役割の機能についてはジェンダーの流動性を示唆するものとして再評価されることもあり、従来の男性性・女性性の境界を意図的に曖昧にする試みとして解釈される余地を残している。

3 BLをめぐる言説がBLに託してきたもの

3.1 従属的なジェンダー構造から一時的な解放機能

先述の2節では男性「性」の表象が多様であり得ることをしめしたが、BLは女性を従属的なジェンダー構造から一時的に解放するという役割をもつとされてきた。上野千鶴子は、BLが女性にとってジェンダー規範からの「解放の場」として機能していると論じた代表的な研究者の一人である。その主張によると、BLは女性読者に対して異性愛的なロマンスや家父長制的な抑圧からの逃避を提供する媒体であるという。具体的には、BLにおいて描かれる男性同士の恋愛関係は、伝統的な「男性—女性」関係のジェンダー・ヒエラルキーを一時的に解体し、女性読者は異性愛的な規範に囚われずに物語を楽しむことができるというのだ。女性読者は、男性同士の恋愛関係を通じて、異性愛的な性別役割の束縛から一時的に解放され、性やジェンダーに対する自由な想像を許される。BL研究では、このジャンルが「避難場所」として機能し、女性読者が自らを性別の枠組みから一時的に解放できる領域であるという点が強調されてきた。藤本（1998）は、BLが女性キャラクターを排除し、男性同士の恋愛を描くことで、女性読者が「女性」であることから解放され、物語に没入することが可能になると指摘している。また、石田（2008）も、女性の視線が欠如するBLの世界において、女性読者は性別に基づく役割から自由になり、物語に没頭できると論じている。このように、BLがジェンダー規範からの避難場所として機能するという初期の研究は、BLを現実逃避の手段として消費するという場を与えたとみている。自分を妄想の対象に置き換えずに妄想する空間を保ってくれる「安全装置」の意味を持つBL（上野 2002）は、少女たちに新たな視点を提供しようというわけだ。

さらに、BLがジェンダー規範を解体する潜在的な力を持つという主張も多く見られる。堀（2010）は、BLが異性愛中心主義的な性別役割を疑問視し、ジェンダーの境界を曖昧にすることで、読者にジェンダーの固定観念を再考させる場を提供すると論じた。この視点は、BLを単なる逃避のためのファンタジーとしてではなく、ジェンダーのあり方を批判的に考察するための媒介として位置づけている。読者にとってジェンダーや性別役割を再考する重要な空間であるとBLを捉える発展的視点である。

しかし、BLが異性愛規範から一時的に離れることが必ずしもジェンダー解放に直結するわけではないという批判的視点も提示されている。上野（2007）は、自身の影響性を自覚し、BLが女性読者に対して一時的な解放を提供しながらも、現実社会におけるジェンダーの抑圧や不平等を根本的に変革するには限界があると指摘している。BLを「ジェンダー規範からの解放」として読む視点は、上野の研究を中心に多くの研究者によって支持されてきたことから、BLが異性愛的なジェンダー規範や社会的期待から解放された空間として読者に提供されているという点は一定程度認められるだろう。今後の課題としては、BLがもたらすジェンダーの解放的側面とその限界を探りつつ、BL作品がどのように社会的規範を再構成する可能性を持つのか、さらに考察を深めることが求められている。

3.2 規範的身体からの解放機能

BLをめぐる研究者の言説には、女性が自らの欲望を反映させる単なるファンタジーに留まらず、現実のジェンダー問題や社会的不平等を反映し、その中で読者に対して批判的な視点を持ちうる可能性へと期待する面もあろう。BL作品が「男であること」や「女であること」ととらわれない純粋な感情のやり取りを描く点が「関係性消費」の議論として受け入れられ、そしてその身体表現の多様さについては評価が与えられている。

BLは、男性の身体を描写することでその身体性に対する多様な表現を可能にし、ジェンダー規範からの「身体の解放性」をもたらす装置として機能してきた。この点において、BLは単に男性同士の恋愛を描くだけでなく、男性の身体を見つめる女性読者が主体となることで、その身体性を再構築する場を提供している。

千田（2012）は、BLにおける男性の身体の多様な表現についても、性別やジェンダー規範の揺るがしを促進し、読者に対して新たな視座を提供するものとして言及している。BL作品においては、細身で美青年のキャラクターのみならず、年齢や身体的特徴を持つさまざまな男性キャラクターが登場し、体毛や加齢などが描かれることで、従来のジェンダーや美の規範に挑戦する場が創出されているというのだ（千田 2012：69-70）。BLにおける男性の身体表現が、体毛や加齢を伴う「おっさん受け」など多様な要素を包摂し、従来の規範的な美しさや若さの枠組みを超えて、「承認」される場を形成していると指摘している。この点においてBLは、従来の異性愛的規範から逸脱し、身体表現に関して多様性を受容する空間として機能する。

藤本（1998）や石田（2008）による研究も、BLが従来のジェンダー規範を揺るがす力を持つことを強調している。すなわち、BLは一種の解放的装置として、男性の身体表現に新たな意味を与え、異性愛的で規範的な身体観を超えた多様性を実現する場として機能する。このように、BLというジャンルは、単なるジェンダーの解放を超え、身体性そのものを再定義し、従来の男性性や女性性に囚われない新たな空間を創造することに寄与しているといえる。

みてきたように、男同士の関係性を描いた「少年愛」表象でもBLでも、それらをめぐる言説では、前提とされてきたのは、同じ性別の身体を持つ男同士は、「異質だが対等」（上野、2002）な関係だ。恋愛関係にある男性同士はあくまでも対等な関係であるという描かれ方が女性「性」の不在と共にBLの王道のパターンとなっていることをうけて、女性読者にとって前述した「安全装置」の役割を果たすのだという論が導かれるのである。BLを読む女性にとってBLの世界が、自分が妄想の対象にならずに妄想する空間を保ってくれる「安全装置」の役割の果たす（上野 2002）のは、身体的に自身と物語におけるキャラクターが距離を確保することに由来する。ここにおいて、BLとは、同性愛関係の禁止によってしか維持されえない異性愛中心主義の構造のほころびを示すために、男性として首尾一貫した身体対等な関係性が描かれる物語群を指すことが前提とされてきたことが分かる。

BLを「ジェンダー規範からの解放」として位置付ける見方は、フェミニズムと密接に関連している。千田（2012）は特に、BLが女性読者にとって、従来の男性中心社会で定められた「見られる」対象としての女性という位置づけから解放し、逆に男性の身体を「見る」主体として自らを位置づけ直すことができる空間であることを強調し以下のように述べる。

少女が母や妻になることで「居場所」を探したのが少女マンガであったなら、BLは母や妻にならなくても、「居場所」を与えたのである。BLという形式は、男女の恋愛では達成できない地平をど

こかしら開いたのだ（千田 2012：68-69）。

上野は、BLが女性読者に異性愛規範からの一時的な逃避を提供するだけでなく、フェミニズムの主張と共鳴し、女性の性的欲望を表現する場としても機能していると論じるが、これは、従来の男性中心的な性的視点に対抗し、女性が主体的に欲望や想像を表現する場としてBLを位置付けることで、BLが単なるエンターテインメントではなく、文化的・政治的意義を持つメディアであることを託してきた査証であるともとれるのである。その中で、「解放」と「規範」の二重性をどう捉えるかが、今後のBL研究の重要な課題となることがわかってきた。

4 ジェンダーの揺さぶりは本当にラディカルたりうるのか

4.1 妊娠する性としてのオメガバース男性表象の登場

BLは恋愛における権力関係の攻防やジェンダーに基づいた社会的規範のない世界を描いていると断言するのは早急である（藤本 2007、2010）。「攻め」と「受け」の役割が依然として異性愛的なジェンダー役割を再生産しているのではないか、という批判は依然として精彩を放つ。BL作品における表象は、「マスキュリンな攻め」と「フェミニンな受け」など、従来のジェンダー規範表現を模倣したものにあふれ、身体と役割を強化し再生産する可能性は指摘されている（石田 2008、堀 2010）。明確な力の差を描くものも数多くあり、往々にして受け役がフェミニンな役割を担う点から、BLが真にジェンダー規範からどの程度解放されているのか、という問いには慎重に向き合わなければならない。

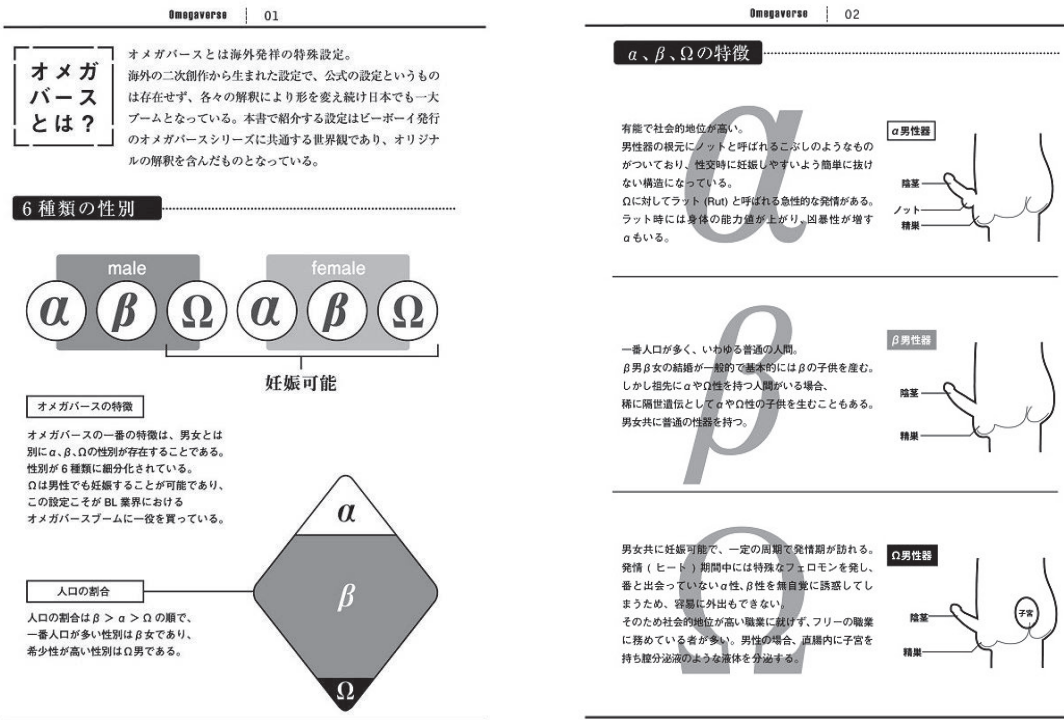
前節で見てきたように、2000年代までのBLをめぐる言説からみえてくる、そこに託されたものとは、女性の欲望を可視化し、女性が完全なる「見る主体」の立場を確保するための安全装置の役割を果たす（藤本 2007；上野 2007）という機能であった。女性読者本人たちに課せられる女性的役割を一時的にであれ忘却させる漫画表現は、男同士の姿を描くことで可能となっていたが、それは、性別化された身体的首尾一貫性が必要となっていたことを示している。金田（2007）や溝口（2015）では、「男同士の身体は妊娠出産と無縁なので、女性を強制的な母性のジェンダー規範から解放する役割を果たす」と分析する。

しかし今、BLがあくまでもファンタジーとしてまなざすにしても、女性のジェンダー的構造からの解放を可能とするこの男性の身体の自明性については、問い直すことが重要となってきた。

2010年代に登場する二次創作に発する新たな性／生の表現では、妊娠・出産が可能な男性表象が行われている。この妊娠・出産可能な男性表象とは、海外発祥の二次創作から誕生した特殊設定のことで、「オメガバース」と呼ばれる。この設定は、作者や出版社によって様々な解釈により世界観が異なるが、こうしたオメガバース設定の自由さこそが、二次創作・一次創作問わず人気になった理由のひとつである。本稿では、出版社「ビーボーイ」によるオメガバースシリーズに共通するオリジナルの世界観に合わせた解説をビーボーイ出版社が提示している解説画像（図1）と共に説明していく。

オメガバースは、BLに限らず、TLやGL（Girls' Love：女性同士の恋愛や性的な関係を描いたライトノベルや同人作品群）などにも広く使用されている。これは、男性の妊娠という設定にとどまらず、女性同士の恋愛や結婚を描く「百合夫婦」や「女攻め」といったテーマにも応用され、多様な読者層に受け入れられるジャンルへと拡大している。しかし、オメガバース全体を見渡すと、その大半がBL作品として描かれており、BLジャンル内で独自の世界観とルールを持つサブジャンルとして注目を集め

図1 オメガバースについての解説（ビーボーイ公式WEBサイトより引用）



ている。オメガバースの世界設定では、「アルファ（Alpha）」「ベータ（Beta）」「オメガ（Omega）」という3つの生物学的階層が存在し（図1参照）、男性キャラクターが妊娠可能な「オメガΩ（オメガ）」として描かれることで、従来の男性性の枠を超えた表象が可能となっている。オメガバースにおける「アルファ」「ベータ」「オメガ」は、既存の「男性」「女性」という性別カテゴリーをさらに細分化する「第二の性」として定義され、これにより計6つの性別が存在する設定が採用されている。この設定に基づく作品の多くは、アルファとオメガの恋愛関係をテーマにし、結婚生活や子どもの妊娠・育児といった家族関係も描かれている。このような描写を通じて、オメガバースはBLにおける男性性表象の新たな地平を切り開いたといえる。

特に、「オメガ」という性は、男性であっても妊娠が可能な性として描かれる。この設定は、「妊娠させる側」であるアルファと「妊娠させられる側」であるオメガという、既存の二項対立的な性別役割の力関係を再現しつつ、物語の中心テーマとして展開される。こうした設定に基づき、男性の妊娠や出産をめぐる葛藤が描かれることで、オメガバース作品はシリーズ化され、多くの作品が生み出されている。

図1に示されるように、オメガバースにおける「第二の性」としての「アルファ」「ベータ」「オメガ」には明確な階級構造が存在する。各性の体質や能力の違いに基づき、社会的な評価や待遇には明らかな差別が生じ、階級社会が形成されている。この階級構造において、最も高位に位置するのがアルファ、中間に属し人口が最も多いのがベータ、そして最下層に位置するのがオメガである。オメガは、身体的

に小柄で成長が遅く、妊娠や性的誘引に特化した身体構造を持つため、弱々しい存在として表象されることが多い。

オメガバースの世界において、オメガは被差別階層として扱われ、その存在が社会の中での不平等や差別の象徴として描かれることが多い。この階層構造は、物語における対立や葛藤の源泉となり、物語の展開において重要な役割を果たしている。オメガ男性の表象は「産む身体」としての身体性のみならず、母性の芽生えやそもそもアルファ男性に守られる存在としての表象であり、身体に限らず従属的な存在を意味するものであるともいえる。すなわち、BL言説における「産む男性」表象の登場は、従来の二極分化的身体と役割を強化・再生産してしまうという批判もできる。オメガバースというジャンルは身分差別の設定をそのまま楽しんでしまう恐れがあるとの堀、守（2010）が指摘する通りであろう。

4.2 新たな性／生がみせるもの

男性の身体を経由して母性が表現されるという点をふまえ、男性の身体を主体として見る女性として立ち上がるとされたBLオーディエンスをより精緻に考え直す必要がある。

高島（2020）はオメガバースを、男性優位社会において女性が抱える苦境を誇張し、それを男性キャラクターに投影する「意趣返し」として捉えている。現実社会における差別やジェンダーの不平等を反映している一方で、特定の作品ではそうした差別の描写が無意識的に扱われていると指摘し、男性キャラクターが妊娠や出産を経験することは、女性のリアルな体験が男性の身体に投影されていることを意味するが、この設定には批判的意図が込められていると高島は論じている。すなわち、男性キャラクターに女性的な身体的特質や社会的役割を担わせることで、女性が日常的に直面する抑圧や不平等を男性に体験させるという。男性キャラクターが妊娠や出産など、通常は女性が経験する身体的・社会的負担を引き受けることで、従来の男性優位社会に対する風刺が表現される。

高島の言説において特に重要なのは、オメガバースに至るBLが「女性を性的対象として見る男性のまなざし」を回避する装置というだけでなく、男性への復讐の場となったと解釈されることだ。高島（2020）の論考は、オメガバースというジャンルが現実社会におけるジェンダーの不均衡を再現しながらも、それを逆転させ、男性キャラクターを通じて「意趣返し」を行うことで、復讐を遂げようとするラディカルな女性の欲望の発露⁵について言及するものである。

妊娠する男性というのは、隷属される存在である。Ω（オメガ）の男性という性／生の登場は、女性の社会的役割を排除したユートピアとして存在させようとするBLの中で、女性役割を引き受け苦悩するキャラクターなのだ。溝口が、現実逃避的な快楽を提供する場としてオメガバースが浸透していったと、ケモミミやモフモフ系と同列してよりファンタジー色の強いジャンルとして分類する⁶一方で高島（2020）は、BLのいくつかの作品をあげながら、「現実逃避」的な面を擁しながらもリアルな現実の苦痛が入り込んでいることを確認する（147）。「性によって記号的に扱われる苦痛は、家父長制社会における助成やクィアの苦しみにも通底するものだ」（146）。女性読者はその苦難を期待して読むのだろうか。腐女子は、〈受〉の不幸を願うのだろうか？「やおいの表現暴力」についての論考で堀はあえて次のような問いかけをする。

性別＝受けのようなキャラクターを、読者はどのような視線で楽しんでいるのか？ 男が犯されていることに溜飲を下げているのか？（堀 2012：182）

堀は、自身の「性」が不在であるからこそ没頭し楽しんできた女性読者に対して常に投げかけられて

きた、「男同士の物語を女のあなたがなぜ好むのか」という問いについてこのような真っ向からの言葉で表現するのである。ここで示した堀の2012年論考は短いものであり、オメガバース設定を考慮に入れたものでも、提起された問題へ彼女自身が十分に熟考できているものとも（論考の目的が違うため）言い難いが、「女性性」または「女性の生」を担う受けの扱いについての問題提起は重要であろう。読者は、オメガバース作品をどのように読み取り、楽しみ、そしてそこに何を託すのか？ やおいを楽しんできた者にむけられるこの居心地の悪い問いは、女性に固有であった妊娠という経験が物語の主軸となったBLの登場により新たな意味を持ちうるはずである。

2010年代以降のオメガバース設定の興隆は、「生」に関わる取り決めや社会的な視線がBLの物語の中で真っ向から扱われるという結果をもたらしている。作品に描かれるオメガ（生むことを期待される性）は現実の女性「性」と地続きとなったのだ。この点において、オメガバースというサブジャンルは、BLにおけるジェンダー表現の進化を象徴している。オメガバースは、ジェンダーの流動性を描くことで、社会的なジェンダー規範を再考させる契機となる重要なフィクションの形式であるといえるが、同時に、そこで扱う社会的問題は読者にとってより現実的なものとなって現れる。ここで著者は、このような変化を、社会に組み込まれた規範へのほころびへの視点（気づき）、そして連帯への接近だと考えるのだが、それはあまりに無邪気だろうか。

5 おわりに

女性の主体性を読み解こうとするフェミニズムの立場にしろ、異性愛中心主義を攪乱する可能性を見出そうとするクィア研究の立場にしろ、いずれもBLから現実のジェンダー構造を揺るがす可能性を探る議論が蓄積されてきた。これまで読者が自身を妄想の対象から排除し、物語と距離を保つ「安全装置」としての役割を果たす点（上野 2002）が指摘されてきたわけだが、BLにおける男性身体の自明性は「産む男性」の登場により再検討を迫られた。異性愛中心主義のほころびを示すと同時に、男性同士の対等な関係性を描くBLにおいて、「孕む」「孕ませる」という明確な権力勾配の不均衡があえて持ち込まれたのだ。読者「性」の不在から成る「解放」が不可能となったとき、社会的「規範」はどう捉えられるのか、やおい・BLの当事者に投げかけられる「なぜBLを読むのか」との問いへと連なるこの問題は新たな局面を迎えている。

紙面の制約により、具体的な事例を通じたオメガバースにおける生とジェンダーの表象の詳細な分析は次稿に譲るが、BLが単なる娯楽として社会的規範から距離を取るものから、より深く読者の実存に関わる実験的な実践の場として理解を改めていく必要性についてはここに至って確認されることだろう。オメガバース作品における身体の表象を「生（セックス）」と「性（ジェンダー）」が交差する場として分析するような研究の深化が求められる。文化的実践やメディアを通じて再生産される社会的規範や権力構造を批判的に分析し、これらが個人や集団のアイデンティティにどのような影響を与えるかを探究するカルチュラル・スタディーズの視点は、このBLの変遷における読む主体にかかる規範とアイデンティティの複雑な関係性にどのような様相を提示しうるのか、その作業の末端の一步として、本稿では、BL表象をめぐる言説として大まかな流れを概説し、ジェンダー規範の跳躍という役割がBLに託されてきたことを明確化した。本稿では、2000年代以降の多様なBL作品と共に蓄積されつつあるBLの機能についての一言説としての提示にとどめ、表象と実在にかかる問題が今後も議論され続けることを願う。

注

- 1 『BL進化論』（2015）の著者である溝口彰子は、BLを女性たちが女性としての自分から逃避しラブとセックスを楽しむための物語群である（254）と定義する。
- 2 WEBメディア株式会社「ハウコレ」がおこなった、女性がBLにハマる理由についての調査によると、TL（Teens' Love：主に性的要素を含んだ男女の異性愛を描いた作品群）では女性の登場により、同じ性別が故に自身の経験から恋愛ストーリーに対して現実ではあり得ないと否定的に捉えてしまうことや、女性キャラクターと自分自身を重ねてしまい、状況を比較してしまうことで不快や恐怖に感じてしまう読者が一定数存在するという結果になった。さらに、TLでは男性キャラクターが女性キャラクターに対して下心から発生する恋愛や女性キャラクターが男性キャラクターに対して母性的要素から生まれる恋愛感情や打算に基づいた恋愛などのパターンが存在し、現実との既視感を覚える一方、BLでは性別の壁や偏見の目を乗り越えた裏のない純粋な気持ちから生まれる恋愛だと読者が解釈することが多く、人気の一つには、堀（2019）が論じているように、肉体的、社会状況、精神的部分を軸に、「攻め」と「受け」の可変的な権力関係からBLの恋愛関係における力とバランスを説明していることで物語を第三者視点のファンタジー要素として作品を読むことができる。
- 3 1970年代、竹宮恵子、萩尾望都らはヨーロッパの男子寄宿学校を物語の舞台とし、少年探知の美しい日常を描いた。石田（2012）によると、背景にはヘルマン・ヘッセによる少年愛表現があったという（127－128）。
- 4 特にジルベールのキャラクター造形が、少女漫画の中で「異性愛規範に囚われない」存在として描かれている点は重要であろう。ジルベールは外見的には繊細で美しく、しばしば「女性的」な要素を持つキャラクターとして描かれるが、その内面は複雑で、時に攻撃的である。このようなキャラクターの多面的な表現は、固定されたジェンダー役割を揺さぶる要因となっている。また、彼の内面の葛藤や、セルジュとの関係において自らの欲望を表明する場面は、従来の「受け」としてのパッシブな役割を超えた、より能動的な存在としてジルベールを描き出している。
- 5 『身体とアイデンティティ・トラブル』（明石書店）にも、「漫画の主人公の少年がそこでは存分に性的にいたぶられる。常に心のどこかに“強姦される恐怖”を抱えている少女たちは、ギャーッと叫んで犯される少年たちに胸のすく思いをする」（三橋修）とある。
- 6 「BLはゲイ差別表現をこう乗り越えた……当事者たちが考える〈ポリコレの先〉」（文春オンライン）溝口彰子、松岡宗嗣、七崎良輔〈<https://bunshun.jp/articles/-/36926>〉（最終アクセス2024年9月30日）

参考文献

- 上野千鶴子. 2002. 『発情装置—エロスのシナリオ』 筑摩書房.
- . 2007. 「腐女子とはだれか？サブカルのジェンダー分析のための覚え書き」『ユリイカ』第39巻第16号：30－36頁.
- 石田美紀. 2008. 『密やかな教育—「やおい・ボーイズラブ」前史』 洛北出版.
- . 2012. 「成熟と自由 遠い隣人から省みるやおい・BLの現在」『ユリイカ2024年12月号BLオン・ザ・ラン』 青土社：126－130頁.
- 金田淳子. 2007. 「やおい論、明日のためにその2」『ユリイカ』第39巻第16号：48－54頁.
- 千田有紀. 2012. 「BLにおける身体表現と承認の問題」『フェミニズムとボーイズラブ』 明石書店, 67－75.
- 高島鈴. 2020. 「オメガバースを読む」『ユリイカ』第763号：142－148頁.

- 中島梓. 1979. 「新・やおいゲリラ宣言」『新版・小説道場4』光風社出版.
- 前川直哉. 2024. 「〈見られる男性・見る女性〉の系譜 絡みあう二次元と三次元」『ユリイカ2024年12月号 BL オン・ザ・ラン』青土社: 138-144頁.
- 藤本由香里. 1998. 「やおい・ボーイズラブの読者としての女性」『フェミニズムとやおい』日本評論社.
- . 2020. 「進化・深化するBL文化: 『風と木の詩』から『きのう何食べた?』まで—ボーイズラブは社会を変えるか」〈<https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00607/?pnum=1>〉閲覧日2024年8月27日.
- 堀あきこ. 2009. 『欲望のコード: マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店.
- . 2010. 「ヤオイはゲイ差別か?」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕⑥セクシュアリティの多様性と排除』明石書店.
- . 2019. 「ラブ&エロの『やさしい世界』のクリアな欲望」ジェームズ・ウェルカー編著『BLが開く扉』青土社.
- . 2020. 「ポルノとBL」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』有斐閣.
- 堀あきこ、森如子. 2020. 『BLの教科書』有斐閣.
- 榊原史保美. 1998. 『やおい幻論』夏目書房.
- 張瑋容. 2021. 「腐女子の「ファンタジー・トラブル」—身体・欲望・妄想をめぐるBLファンタジーの存在論」『お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』(24): 113-130.
- 三橋修. 2008. 「におう身体」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル』明石書店.
- 溝口彰子. 2015. 『BL進化論: ボーイズラブが社会を動かす』太田出版.
- . 2017. 『BL進化論 [対話篇]: ボーイズラブが生まれる場所』宙出版.
- よしながふみ. 2007. 『よしながふみ対談集 あのひとつとここだけのおしゃべり』太田出版.